# スカルノのゴトン・ロヨン概念化と日本軍政

小　林　和　夫

## はじめに

本論の目的は，スカルノが「パンチャシラの誕生」のなかで「パンチャシラ」（五原則）[1]を縮約するものとして提示した「ゴトン・ロヨン」（相互扶助）の概念化に対する日本軍政の影響を考察することにある。

スカルノによるゴトン・ロヨンの概念化は，日本の敗戦を約２ヵ月後に控えた1945年６月１日のインドネシア独立準備調査会（Badan Penyelidik Usaha-Usaha Persiapan Kemerdekaan Indonesia）[2]における演説「パンチャシラの誕生」（Lahirnya Pancasila）のなかで公式に発表された（Kahin 1952:126, Weatherbee 1966, Dahm 1969:349-50, Pranarka 1985:31-3, 土屋 1994:275, Hering 2002:355-6, Legge [1972] 2003:209-12, Taylor 2003:322）。

スカルノは「パンチャシラの誕生」のなかで，世界には多数の独立国家があり，それぞれの国家はそれぞれ独自の世界観や国家哲学の上に樹立されているという認識を示し，インドネシアという独立国家が国是とするべき世界観や国家哲学は何かと問いかける。スカルノはすでに1918年からこの世界観について反芻してきたと述べ，五原則，すなわちパンチャシラを国是としてあげた（Soekarno [1945]1947:n.d）。この五原則を，スカルノが演説のなか

で発言した順に示すと，インドネシア民族主義（Kebangsaan Indonesia），国際主義または人道主義（Internasionalisme atau Perikemanusiaan），全会一致または民主主義（Mufakat atau Demokrasi），社会的繁栄（Kesejahteraan Sosial），唯一神への信仰（Ketuhanan Yang Maha Esa）となる[3]。

ここで，重要な点は，上述の五原則が最終的には１つの原則に収斂されることをスカルノが強調している（Soekarno [1945]1947:n.d）ことである。そして，その１つの原則こそが，スカルノがインドネシア固有の「伝統」[4]としたゴトン・ロヨンであった（Legge[1972]2003:211-2)。スカルノのゴトン・ロヨンの提示とは，新国家の国是である五原則を収斂させてこれをひとつの「伝統」に約言したものと位置づけられよう。

これまでの先行研究のなかでは，ベネディクト・アンダーソンが，日本占領期のさまざまな大衆組織や政治行動が，スカルノの「指導される民主主義」体制の多くの局面で復古したことを指摘している（Anderson 1966 :25)。

本論でとりあげるスカルノが概念化をはかったゴトン・ロヨンという「伝統」も，スカルノじしんが「指導される民主主義」を正当化する文脈で頻繁に用いた。しかし，ゴトン・ロヨンという「伝統」は，「パンチャシラの誕生」以前にすでに日本占領期に軍政当局によってさかんに鼓吹されていたことが確認できる（小林 2006b)。したがって，スカルノのゴトン・ロヨンの概念化については，日本占領期における日本軍政の施策や軍政当局のゴトン・ロヨンの鼓吹との関係から新たにとらえ直して考察する必要があるはずである。それにもかかわらず，先行研究では，スカルノのゴトン・ロヨンの概念化について，日本軍政の影響という視点から再構成された詳細な論考は管見では皆無に近い[5]。

以上の問題をふまえて，本論では，スカルノのゴトン・ロヨンを概念化に日本軍政が与えた影響について論じる。本論の構成を示す。１では，スカルノがゴトン・ロヨンの概念化をはたす歴史的端緒を，スカルノの論文「インドネシア独立の達成のために」とマルハエニズムの概念化の２点を対象として論じる。２では，日本占領下でインドネシアの歴史上はじめて組織化の過

程で動員されていく大量のマルハエンとスカルノとの出会いの意義を考察する。3では，スカルノがジャワ社会の基層をなすデサの共同性と自治性に注目していたことを述べたあとで，日本軍政当局が承認した民衆総力結集運動による意図せざる結果を論じる。4では，日本軍政当局による「伝統」の教示と「伝統」への回帰の唱道と，スカルノのゴトン・ロヨンの最終的な概念化が通底していたことを示す。結語では本論の知見のまとめと今後の課題を述べる。

## 1．スカルノのゴトン・ロヨン概念化の端緒

### (1)「インドネシア独立の達成のために」

スカルノがゴトン・ロヨンという語彙をはじめて使用したのは，1933年3月に発表した論文「インドネシア独立の達成のために」(Mencapai Indonesia Merdeka）においてである（土屋 1971b：84；1994：155，桁沢 2004：10)。ここで，スカルノが「インドネシア独立の達成のために」のなかで，ゴトン・ロヨンをどのように用いていたのかを以下に確認してみよう。

> 前衛党[6]は，いまや大衆の心象のなかに「平等と共感」(kesama-rata-sama-rasaan）の種子をまかねばならない。また，大衆の心象のなかに「ゴトン・ロヨン」の種子をまかねばならない。それは，幾世紀も「個人主義という宿痾」(penyakit individualisme）に侵されてきた大衆が，いまこそ，「新しい人間」(manusia baru）—周囲の安寧（keselamatan umum）を常に重んじる「社会的人間」(manusia masyarakat）をおのずと意識する—に生まれかわるためである。(Soekarno [1933]1959：322)

スカルノは，インドネシア大衆の永年の宿痾を個人主義と措定し，この宿痾を克服した「社会的人間」を意識することのできる「新しい人間」という従来にないインドネシア人を誕生させるために，「平等と共感」とゴトン・

ロヨンの種子をインドネシアの大衆の心象にまく必要性を主張している。そして，この一文から，スカルノがゴトン・ロヨンを「個人主義という宿痾」に対置する「平等と共感」の同義語として抽象的に用いていることがわかる。つまり，スカルノがゴトン・ロヨンをはじめて引用した段階では，ゴトン・ロヨンとは個人と社会との関係性をあらわす抽象的な概念に過ぎなかったことがうかがえる。そもそも，スカルノが「インドネシア独立の達成のために」を執筆した当時，ゴトン・ロヨンはまだ新しい語彙であった。ゴトン・ロヨンというジャワ語は，1900年代初頭から1930年代までにあらわれた（桁沢2004：6）と判断できるからである。当時，ゴトン・ロヨンが語彙としては新語の範疇にあったことは，日本占領期にインドネシア語普及のために創設されたインドネシア語委員会が，ゴトン・ロヨンを新語リストのひとつとして収録している（*Kan Po* No.37:31）ことからもわかる。さらに，「インドネシア独立の達成のために」では，ゴトン・ロヨンということばには新語を意味すると思われる引用符が付されている（Soekarno [1933]1959：322)。この引用符を，スカルノ自身が付したのか，あるいは同論文を収録した出版社の編集部が付したのかは判断できない。しかし，少なくとも，スカルノがはじめてゴトン・ロヨンを引用した段階では，ゴトン・ロヨンが「平等と共感」の同義語として配列されるような抽象的な概念に過ぎなかったことは間違いないだろう。ゆえに，土屋が指摘しているように，ゴトン・ロヨンは1933年3月の段階ではまだインドネシアの「民族の魂」としては意識されておらず（土屋 1994：154)，「パンチャシラの誕生」のゴトン・ロヨンの提示にみるような完全な概念化には遠く及んでいなかったといえる。

管見では，1933年3月の「インドネシア独立の達成のために」以降は，ゴトン・ロヨンの概念化の深化がうかがえるようスカルノの言説の記録は存在しない。この理由は，「インドネシア独立の達成のために」を発表後，同年8月には反政庁活動を理由にバタヴィアで逮捕され，翌年の1934年2月からは流刑地であるフローレス島のエンデに幽閉されたことと無関係ではないだろう。その後，スカルノは流刑地エンデでマラリアに罹病したため，1938

年２月からはスマトラ島の遠隔地であるベンクルに移送されている。つまり，スカルノはゴトン・ロヨンをはじめて使用した1933年３月からほどなくして流刑され，日本占領期に入って解放されるまで政治的自由が奪われた厳しい監視下の生活を強いられていたのである。スカルノは，エンデとベンクルという２つの流刑地でスカルノは大衆の前で演説する機会は奪われたが，旺盛な執筆活動を展開した。しかし，現実の政治状況についての発言や，オランダ植民地政府に対する批判は制限された（土屋 1994：193)。まして，流刑というきわめて政治的自由が奪われていた状況下で，スカルノが「パンチャシラの誕生」で展開したような文脈でゴトン・ロヨンを引用してその言説を記録として残すことは物理的に不可能であったと考えられる[7]。

(2) マルハエニズムの概念化

では，スカルノのゴトン・ロヨンの概念化はどのような歴史的契機を経て深化していったと考えられるのだろうか[8]。

土屋は，「パンチャシラの誕生」にいたるスカルノの思想的変遷を４期に分けて整理し，最後の第４期である日本占領期に，民族指導者スカルノがゴトン・ロヨンに縮約されるパンチャシラというインドネシアの国家原理と民族エートスを表明する最後の目標をきわめたと述べている（土屋 1971a：579)。また，土屋は，スカルノが日本占領期に最後の目標をきわめた直接的な歴史的契機を，スカルノと日本軍政によってはじめて大量に組織化され軍事訓練を施されていくマルハエンとの日常的な接触（土屋 1971a：579）に求めている。

マルハエンとは，スカルノがインドネシア人民を総称することばとして頻繁に用いた造語である。スカルノは，マルハエンということばを，1930年の法廷陳述『インドネシアは告発する』のなかではじめて用い，「『小さき民である農民，労働者，交易商人，船乗り』などインドネシア社会の主要な構成員で長きにわたって帝国主義支配の下にある人民を総称するもの」（土屋 1991：414-5）と位置づけている。

スカルノは『自伝』のなかで，マルハエンの概念化にいたった若い農夫との会話を紹介している。ここで，スカルノの『自伝』から，該当部分の記述の一部を引用してみよう。

スカルノ：「あんたが耕しているこの土地は誰のものだい」
農夫　：「わたしのものです」
スカルノ：「この土地は誰かと共同でもっているのかね」
農夫　：「いいえ，わたしだけのものです」
スカルノ：「あんたが土地を買ったのかね」
農夫　：「いいえ，代々，父から子へと引き継いできたものです」
スカルノ：「あんたのシャベルはどうだい。小さなシャベルだが，それもあんたのものかい」
農夫　：「そうです」
スカルノ：「その鍬は誰のものだい」
農夫　：「はい，わたしのものです」
スカルノ：「鋤はどうだい」
農夫　：「わたしのものです」
スカルノ：「あんたが耕した作物はだれのものだい」
農夫　：「わたしのものです」
スカルノ：「それで足りるのかい」
農夫　：「こんな少ない作物で女房と4人の子どもをまかないきれるはずがありません」
スカルノ：「収穫をいくらか売るのかい」
農夫　：「自分たちが食べるのに精一杯で，売る余裕はありません」
スカルノ：「だれかを雇っているのかい」
農夫　：「いいえ，そんな余裕はありません」
スカルノ：「働いたことはあるかい」
農夫　：「いいえ，わたしは懸命に働かなくてはなりませんが，それ

もみなわたしのためです」

スカルノ：「あの家はだれのものだい」

農夫　　：「あれは私のものです。小さいですが，私のものです」

スカルノ：「それじゃ，全部あんたのものだというのだね」

農夫　　：「はい，そのとおりです」

(Soekarno 1965c:61-2)

スカルノはこれら一連の会話のあとにこの若い農夫に名前を聞いたところ，彼はマルハエンと答えた。スカルノは，このマルハンエンという名前をもつ農夫との会話とその姿から，小さな生産手段しかもたないものの，搾取されることなく自足自給の生活をおくっているインドネシア人民の象徴をみてとったのである。スカルノはこのありようを，マルハエニズム[9]とよび，じっさいに作用しているインドネシア社会主義と位置づけたうえで，インドネシア国家にとっても象徴が必要だと述べている（Soekarno 1965c:63)。

たしかに，スカルノのこのマルハエンの概念化の過程には，それほど深い洞察はうかがえない。白石のことばを借りれば「社会学的な洞察はない」（白石 1997：18）といえる。

しかし，重要なのは，スカルノがマルハエンという呼称のなかに国家のアイデンティティの象徴を看取していたことと，建国すべきインドネシア国家にも象徴が必要だと認識していたことである（Soekarno 1965c:63)。既述のように，スカルノは国是パンチャシラを縮約する象徴としてゴトン・ロヨンを提示した。また，スカルノは1965年3月24日の演説のなかで，マルハエニズムとは，苦悩のなかにあるすべてのインドネシア人（semua kaum melarat Indonesia）であれば，あらゆる社会層（golongan）を包摂する概念であると述べている（Soekarno 1965b:5)。このことから考えれば，スカルノにとってマルハエニズムの概念化は，建国の指導者として「国家原理と民族エートス」（土屋 1971a:579）の輪郭を示す最初の契機となったとあとづけることができよう。

## 2．組織化されたマルハエンとの邂逅

ジャワを統括した陸軍第16軍の初代司令官・今村均が回想しているように，日本占領期に入ると軍政当局はスカルノの協力が軍政上有利になると判断し（今村 1971：396），スカルノを流刑地であるベンクルから解放した。そして，軍政当局はオランダ植民地時代にはみられなかった規模の全国的な大衆組織をつくりだした（Kanahele 1967=1977:348）。白石の言葉を借りれば，歴史的にみて「国民動員のインフラストラクチャ」（白石 1996：40）がはじめて整備されたといえる。

この結果，スカルノは，日本軍政によって歴史上はじめて大規模に組織化され，あるいは軍事教練を施されていくマルハエンたちと日常的に接触する機会を得たのである。では，日本軍政によって組織化されたマルハエンたちとの日常的な接触は，スカルノのゴトン・ロヨンの概念化の契機に具体的にはどのように寄与したと考えられるのであろうか。

谷口五郎[10]は「スカルノは彼らがこれまで技術的に不足していた日本の民衆組織法を注意深く研究していた。労務者の組織，青年団，警防団，兵補（日本軍隊の補助兵），隣組の組織などが彼の関心の対象であった」（谷口 1966：88）と述懐している。谷口が列挙した組織のなかでも，スカルノがとくに関心をもっていたものが隣組組織であった。隣組組織は，日本軍政当局が導入した諸制度のなかで村落社会にもっとも浸透した制度（小座野 1997：16）であった。このことを，本論に引き寄せていえば，隣組組織によって，ほぼすべてのマルハエンたちが地域社会の末端に包摂されたことを意味する。したがって，スカルノは，ジャワの隣組制度に対しては，歴史上もっとも大量のマルハエンたちを組織化して動員することに成功したはじめての民衆組織として，ひとかたならぬ関心を寄せていたと推論することができよう。

ここで重要な点は，谷口のいう民衆組織法の戦略として，隣組制度の導入と普及にあたって日本軍政当局がさかんに用いたものが，ジャワの「伝統」

として位置づけられたゴトン・ロヨンであったことである（小林 2006b）。つまり，歴史的な時間軸からみれば，ゴトン・ロヨンという「伝統」は，スカルノが「パンチャシラの誕生」でゴトン・ロヨンの概念化を完成させる以前に，日本軍政当局によってすでに「民族の魂」とほぼ同義の「伝統」として鼓吹されていた事実が確認できるのである。

スカルノは自伝のなかで，何年もかけて国家原理や民族エートス，すなわち，ゴトン・ロヨンの概念化を「自分の頭蓋のなかであれこれと考え続けてきた」(Soekarno 1965c:197) と回想している。スカルノは，日本占領期にも「パンチャシラの誕生」で提示した「民族の魂」としてのゴトン・ロヨンの最終的な概念化をこころみていたことがうかがえる。

ゆえに，先述した谷口のスカルノに対する洞察が妥当であるとすれば，日本軍政によってゴトン・ロヨンという「伝統」が鼓吹されながら，無告のマルハエンたちがこれまでになく大量に組織化され，動員されていく過程を，ゴトン・ロヨンの概念化を模索し続けてきたスカルノが，ただ黙してみていたとは考えにくい。むしろ，来るべき独立国家の建設に備えて，ゴトン・ロヨンという「伝統」をかかげた日本軍政によるマルハエンたちの組織化と動員の機制をつぶさに観察しながら，ゴトン・ロヨンの概念化の完成に向けて考察を深めていったと考えるほうが自然であろう。

歴史上かつてない大量のマルハエンたちの組織化と動員が，ゴトン・ロヨンという「伝統」の名のもとに日本占領期のジャワの隣組組織で一律に展開されたことは，民族の「伝統」を内発的に考察していたスカルノのゴトン・ロヨンの最終的な概念化に一定の影響を与えたと判断できよう。

## 3．スカルノのデサへの視線と，民衆総力結集運動の意図せざる結果

スカルノのゴトン・ロヨンの概念化にみられる民族エートスの歴史的な内省は，ジャワ社会の共同性と自治性が顕現する共同体としてのデサ[11]に向けられていた。

加納啓良によれば，デサ[12]は19世紀以降オランダ植民地政府によって「村落共同体」として整備が進められ，後の慣習法学者たちはこれを伝統的な慣習法共同体ととらえた（加納 1990：282)。したがって，歴史的にみれば，デサとは村落社会における共同体的な性格を残しながらも，純粋な共同体そのものとして発達したものではなく，オランダ植民地政府のてこ入れによって植民地統治のための政策として整備されたものであった。

増田與は，スカルノのゴトン・ロヨン概念化を，「デサの持続諸要因を全民族的な規模で組織してゆく上での統合原理」（増田 1971：385）とみている。スカルノはデサという共同体にみられる歴史的な連続性を国家の基礎として，独立国家インドネシアを建設するための統合原理としたのである[13]。このデサにおける歴史的連続性を国家の統合原理とするスカルノの認識は，1943年2月5日に開催された旧慣制度調査委員会[14]の非識字者問題をめぐるスカルノの一連の発言のなかにすでにみられる。ここで，旧慣制度調査委員会の議事録[15]のなかから該当する部分を抽出してみよう。

まず，スカルノは「當爪哇ハ農本社会デアリマス」（戸田 1995［第7回］：4）と述べて，ジャワ，ひいてはインドネシア社会の基層が農村によってささえられているという認識を示す。上述のデサとは，スカルノが述べている「農本社会」を構成する共同体のことを意味する。そして，スカルノは，非識字者の撲滅にあたって農村指導者を対象とした農村の再編成が何よりも必要だと主張している。そして，スカルノは，農村の再編成を「精神力アル国家ノ一部ノ有能的ナ存在タラシメ民衆，民族，祖国ヲ愛スルモノタラシメルコト」（戸田 1995［第7回］：4）と定義している。

さらにスカルノは，以下のように発言している。

> 農村社会ノ精神ヲ1ツノ活力的ナ国家精神ニ統合スルコトニ，為政者ト民衆ガ一致協力シテ行クヨウ指導，支援下サルコトヲ願フモノデアリマス。（戸田 1995［第7回］：4）

ここで注目されるのは，スカルノが「パンチャシラの誕生」で提示した新国家建設のための国家原理や民族のエートスという原則の輪郭が，上述の「農村社会精神の１つの国家精神への統合」という発言のなかにあらわれていることである。このスカルノの発言が，民衆総力結集運動[16]の近日の創設を前提としてなされている事実は見逃してはならない点である[17]。既存の三亜運動にかわって実施された民衆総力結集運動は，日本軍政が許可する範囲でスカルノはじめ民族主義者が指揮をとる「はじめてのインドネシア人だけの手になる大衆組織」（Kahahele 1967=1977:117）であった。このことは，日本軍政への協力が前提とはいえ，インドネシア人の手によって指揮される実体のある大衆組織が日本軍政によってはじめて承認されたことを意味している。つまり，スカルノはじめ民族主義者たちが，歴史的にみてはじめて，みずからが大衆組織の運営を行うことになったのである。

スカルノがこの民衆総力結集運動の創設を目前にして，「農村社会ノ精神ヲ１ツノ活力的ナ国家精神ニ統合スル」という発言をしたひとつの大きな背景として考えられるのは何だろうか。それは，ゴトン・ロヨンの最終的な概念化を深化させていたスカルノが，民衆総力結集運動の承認によって，実体のある大衆組織の先頭に立ってマルハエンたちを中心的な指導者として，共同性と自治性を内包するデサという場で束ねる機会を得たことにほかならない。日本軍政当局による民衆総力結集運動の承認は，意図せざる結果として，スカルノにゴトン・ロヨンの概念化のさらなる深化の具体的な契機を与えたのである。

## ４．日本軍政による「伝統」の教示と「伝統」への回帰の唱道

日本軍政は，ゴトン・ロヨンという「伝統」が，オランダ植民地時代の個人主義や自由主義の影響によって伏在させられたとみていた（芳岡 1944）。そのため，インドネシア社会は個人主義や自由主義を廃して，本源的なゴト

ン・ロヨンという「伝統」を基礎とする社会に回帰するべきであるというという構図が描かれた。ここで，ジャワ軍政監・山本茂一郎[18]の「伝統」への回帰についての見解をみてみよう。

共栄圏の思想を真に理解するには，所謂西欧的なる権利義務の思想を排除し，東洋的人物の思考に入らなければならぬ。しかも現在の状況は，この点について深い認識がまだ不十分で，極めて浅薄なる物の考え方をして居る。その意味において私は現地住民諸君に「インドネシア本然の姿に還れ」といふことを言っている。私の言ふ「インドネシア本然の姿に還れ」とは，インドネシアがオランダの圧制を受ける前の姿に還れといふ意味には違ひないが，決して復古主義を唱えているのではない。私の言はんとする所は，東洋的なる人物の物の考へ方，この本然の姿に還れといふことであって，今から400年前の昔への復古を言うているのではなく，物の考へ方を要求しているのである。喪はれた東洋人として，ジャワの伝統及び東洋人の血を再発見すべきことを望むのである。

(山本 1944, 8-9　傍線は筆者)

この山本の見解に描かれている構図をもとにして，日本軍政当局は，ゴトン・ロヨンを厳しい総力戦体制下の社会で相互扶助を表象する「伝統」として価値了解的に鼓吹した。

それでは，なぜ軍政当局は「伝統」を鼓吹したのだろうか。ここで，軍政当局の宣撫工作の中心者だった軍政監部宣伝部の清水斉の以下の言説から考えてみよう

西欧的理論の展開されざる以前のデツサ精神，即ちゴツ(ママ)トンロヨンの精神を正しく導き，発展せしむる事に依つて，インドネシア精神の基本を培養し大東亜精神を把握せしめるのである。(清水 1944：29)

清水の言説は，ゴトン・ロヨンを理想とする近隣社会が，日本軍政が志向する統制と動員を基礎とする総力戦下の社会体制ときわめて親和性をもつことを示している。軍政当局は，このため，このゴトン・ロヨンを基礎とする近隣社会の相互扶助の世界という理想像を否定するものとして，西欧の個人主義や自由主義を排撃したのである（小林 200b）。

以上から，日本軍政当局は，ゴトン・ロヨンをとおしてインドネシアのマルハエンたちに民族の「伝統」を教示し，同時に，民族の「伝統」への回帰を説いたといえる。それでは，このような日本軍政当局の「伝統」の教示と，「伝統」への回帰は，スカルノのゴトン・ロヨンの概念化にどのような影響を与えたのであろうか。

ここで，スカルノが「パンチャシラの誕生」のなかでゴトン・ロヨンについて言及しているくだりの一部をみてみよう。

> ゴトン・ロヨンとは，ともに労苦し，ともに汗を流し，ともに助け合いながら闘うことである。万人の利益のために万人が実践に励むこと，万人の幸福のために万人が汗を流すこと。万人の利益のために，みんなそろっていっしょに起き上がること（Ho-lopis-kuntul-baris）。これがゴトン・ロヨンである。富める者と貧しい者とのあいだ，イスラーム教徒とキリスト教徒とのあいだ，そして，純粋のインドネシア人（Indonesia tulen）ではないものとインドネシア民族となった外国の出自をもつもの（peranakan）とのあいだのゴトン・ロヨンの原則。諸君，これが，私が諸君に提案するものである。（Soekarno [1945]1947:n。d）

上記の内容からわかるように，スカルノは，新しい国家建設のために，政治・経済・宗教・民族などさまざまな異なる党派制を超越して全体の調和を可能な限りはかることのできる価値了解的な「伝統」としてゴトン・ロヨンをかかげたことがうかがえる。

スカルノは「パンチャシラの誕生」において，インドネシアの独立という

民族の悲願達成のために，ゴトン・ロヨンという「伝統」が描く相互扶助という価値了解的な表象性に着目しながら，立場や見解の異なるすべての社会諸勢力の団結を訴えたのである。

さらに，スカルノが『自伝』のなかで，「パンチャシラの誕生」について回想している一部を引用してみよう。

> 私はパンチャシラを創造したとはいわない。私がなしたのは，私たち自身の伝統の大地を深く掘り進み，５つの美しい真珠を見つけだしたことである。(Soekarno 1965c:197　傍線は筆者)

スカルノはパンチャシラを新たに創造したとはいわず，インドネシアという「伝統」の大地からパンチャシラを内発的に探りあてたという表現を使っている。くりかえしになるが，スカルノにとって「パンチャシラの誕生」で提示した五原則とは，「インドネシアの国家原理と民族エートス」(土屋 1971a:579) にほかならなかった。したがって，スカルノにとって，パンチャシラとはまったく新しい創造の営為によって構築されたものではなく，インドネシアの「伝統」が根ざす大地にはりめぐらされた５つの鉱脈を注意深く掘り起こす作業であったのである。

以上，ゴトン・ロヨンという「伝統」をめぐるジャワ軍政監・山本茂一郎，軍政監部宣伝部の清水斉，そしてスカルノの解釈をみてきた。これらの解釈からわかることは，日本軍政当局の「伝統」の教示，および，「伝統」回帰の唱道の機制と，スカルノの回想にみられる「伝統」のとらえ方がきわめて近似していることである。いうまでもなく，日本軍政による民族の「伝統」の教示と民族の「伝統」への回帰の導きは，戦争遂行の正当化のために喧伝された「アジアの解放」や「大東亜建設」というイデオロギーを基礎としていた。しかし，この日本軍政当局による民族の「伝統」の教示と民族の「伝統」への回帰の導きは，何年もゴトン・ロヨンの概念化をこころみてきたスカルノには，きわめて鮮烈に映ったに違いない。なぜなら，スカルノが「私たち

自身の伝統の大地」(Soekarno 1965c:197)を歴史内発的に考察することによって模索してきたゴトン・ロヨンの概念化と，日本軍政が行った民族の「伝統」の教示と民族の「伝統」への回帰の導きは，もとより両者の目的に大きな差異はあっても，ゴトン・ロヨンという「伝統」に象徴される民族エートスの歴史的な内省という点では通底していたからである。

日本軍政当局の「伝統」の鼓吹の機制と通底していたスカルノのゴトン・ロヨンの概念化は，やがて，インドネシアの政治エリートの大部分が志向していた社会理論の基礎をなす西欧民主主義，イスラーム近代主義，マルクス主義，そして多様な村落民主主義や共同体主義などの思想を統合するものとしては，パンチャシラはほかに類例のない原則（Kahin 1952:123）となっていくのである。

## 結語

本論でみてきたように，スカルノが「パンチャシラの誕生」で示した建国五原則を縮約するゴトン・ロヨンという「伝統」は，スカルノの論文「インドネシア独立の達成のために」の発表と，マルハエニズムの概念化にその端緒をみいだすことができる。

スカルノのゴトン・ロヨンの概念化は，スカルノの共同性と自治性を内包するデサへの視線を基礎として，日本軍政当局の民衆総力結集運動の承認と大衆組織の整備によってさらなる深化をはたした。この２つの軍政当局の施策は，スカルノが実体をもつマルハエンたちとの邂逅をはたす歴史的契機となった。さらに，日本軍政当局の「伝統」の教示，および，「伝統」回帰への唱道は，スカルノが「パンチャシラの誕生」や『自伝』で言及している「伝統」のとらえ方ときわめて近似していることがうかがえた。

以上から，スカルノのゴトン・ロヨンの概念化には，日本軍政当局による「伝統」の鼓吹の影響が一定程度投影されていると判断できよう。

白石は，日本占領期の社会的コントロールの動員の技術が，スハルト新秩

序体制でも体系的に再導入されたと述べている（白石 1996:71-2)。この白石の指摘は，「はじめに」で示したアンダーソンによる日本占領期とスカルノの「指導される民主主義体制」との連続性という知見と合わせて考えれば，きわめて示唆的である。

今後の課題としては，日本占領期における大衆動員や統制の施策と，スカルノの「指導される民主主義」体制，および，スハルト新秩序体制のそれとの連続性にまで視野を拡大した詳細な研究が必要になる。この研究課題は，ハリー・ベンダが，インドネシア現代史の分析視点としてあげた「持続要因と変化要因」（Benda 1965:1058）の探求にも通じていくはずである。

注

1　インドネシアの国是となった「パンチャシラ」（五原則）については，スカルノが唯一の発案者ではなく，ムハマド・ヤミンやスポモも同種の原則を独立準備調査委員会で提示している（Notosusanto 1981;1982)。しかし，「パンチャシラ」を構想した３名のうち，「パンチャシラ」をひとつの概念に縮約したのはスカルノのみである。本論では，日本占領期に軍政当局によって鼓吹された「ゴトン・ロヨン」（相互扶助）を，スカルノが「パンチャシラ」（五原則）を縮約するものとして位置づけた事実に注目して論じる。

2　独立準備調査会は 1945 年４月１日に日本軍政より設置が承認された。後にスハルト政権で副大統領を務めたアダム・マリクは，設置から３ヶ月にわたる議論を同年６月１日にスカルノが総括したと自伝のなかで披瀝している（Malik 1980：119)。

3　1945 年憲法の前文では次の表現と順番になっている。唯一神への信仰，公平で文化的な人道主義，インドネシアの統一，協議と代議制において英知によって導かれる民主主義，インドネシア全人民に対する社会正義。

4　ホブズボウムは「創りだされた伝統」を「１つには，実際に創り出され，構築され，形式的に制度化された『伝統』であり，さらには，容易には辿ることはできないが，日付を特定できるほど短期間―おそらく数年間―に生まれ，急速に確立された『伝統』」［Hobsbawm 1983=1992, 10］と定義している。本論では「伝統」を，後者の「容易には辿ることはできないが，日付を特定できるほど短期間―おそらく数年間―に生まれ，急速に確立された『伝統』」の意味で用いる。

5　「指導される民主主義」体制とスカルノによって用いられたゴトン・ロヨン言説との関係についてはウェザービーによる丹念な研究がある（Weatherbee 1966)。しかし，ウェザービーも，日本軍政がスカルノのゴトン・ロヨンの概念化に与えた影響

については，まったく言及していない。

6　前衛党とは，スカルノが出獄後に参加したパルティンドをさしている。

7　スカルノは自伝のなかで，ベンクルでの厳しい監視下の生活の一端を次のように回想している。

秘密警察は，昼夜を問わず私の家を監視していた。すべての訪問者は，その名前が記録され，翌日には審問のために召喚され，さらに，私服警官にも尾行された。(Soekarno 1965a:138)

8　スカルノは自伝のなかで「孤独なフローレスで，あまたの時間を樹木の下で1人熟考し，パンチャシラと名づけた『五原則』が，神から賜ったインスピレーションの実際の構成となって私の心のなかに浮かんできたのである」(Soekarno 1965a:197）と回想している。スカルノの回想どおり，流刑地であるフローレスのエンデですでにパンチャシラの概念化を完成させていたかは判断できないが，少なくとも，スカルノが流刑地にあってもゴトン・ロヨンの概念化を徐々に内在的に深化させていったことは間違いないだろう。しかし，ここではスカルノのゴトン・ロヨンの概念化に与えた最終的な契機を問題とするので，流刑地におけるスカルノのゴトン・ロヨンの概念化の内在的な深化についての詳細な考察は措く。

9　マルハエニズムのさらなる考察についてはスマルヨトの議論を参照（Soemarjoto n/d）

10　谷口は，1928年に早稲田大学を卒業後ジャワにわたり，1937年には日本のインドネシア占領以前にジャワで唯一発行されていた日本語紙・東印度日報の主筆となった。そして，日本占領期には佐官待遇の軍政監部の企画課員として民族対策を担当した。また，谷口は，日本軍政の諮問機関であった旧慣制度調査委員会の幹事を務め，スカルノの言動をじかに見聞する機会を得る立場にあった。さらには，中央参議院では議事課の一員および通訳員として所属し，スカルノをはじめとする議員たちの議論を直接聴いていた。さらに，谷口はジャワ新聞会事務局長として日本占領下のジャワの新聞界を指導・監督する立場にもあった（谷口 1991：261)。

11　宮武正道が指摘しているように，1940年代初めまでに日本で発行されていたインドネシアに関する一般書は経済資源に焦点をあてたものや紀行などが多く，インドネシアの民族や社会について詳細に論じているものはきわめて少ない（宮武 1942：i)。また，ジャワのデサについては日本人による詳細な論考は皆無に近く，デサの概観についての文献はブーケやファーニバルなどが著した書籍の翻訳書が大部分であった。当時，日本のインドネシアをはじめ東南アジア諸国の外交業務を統括していた外務省南洋局（後に大東亜省に改組）が秘密文書として1943年10月に発行した『東インド土民村落共同體「デサ」ニ就テ』にも，ジャワのデサに関しては「我国ニ於テ此ノ方面ノ研究ニ筆ヲ染ムルモノ殆ンド見当ラザル現状」(外務省南洋局 1943：i）と述べられている。しかし，その一方で，同文書ではデサの重要性について「東印度農民ノ社会ハ『デサ』（村落共同体）ニソノ基礎ヲオクモノデアル従

ツテ「デサ」ノ本質ヲ究メズシテ東印度農民ノ生活ハ語レナイ」(外務省南洋局 1943：1) と認識していた。

12 加納によれば，デサという用語法がいつまで遡及するかは定かでないが，史料としては18世紀末から19世紀初めにデサによる耕地共有についての記述がみられるという (加納 1990：282)。

13 日本軍政当局は，上述のような特徴をもつデサをどのようにみていたのだろうか。以下に軍政当局の官吏たちの言説をみてみよう。

総務部調査室・井上謙二

「デサはジャワの社会構成上唯一の共同体単位として，在ったものである」(井上 1945：39)。

総務部調査室・鳥養太一郎

「デツサは彼らにとって唯一の世界であり，唯一の社会でもあり，その政治生活を規制する主体でもある (鳥養 1944：66)。

総務部調査室・高岡信次

ジャワのデツサはそれ自体で完結する一個の塊の如き生活体であり，この生活共同体は，その成員が互ひに自らの生活といとなみをその内部に向かつ手開き合ふことによつて結びついた」(高岡 1945：70)

これらの言説から明らかなように，いずれの官吏も，デサを無二の生活共同体ととらえていることがわかる。日本の軍政当局は無二の生活共同体ととらえたデサという単位を基礎として，軍政に最大限に利用することを考えていた。このことを傍証しているのが，ジャワ軍政監部政務班長の斉藤鎮男の以下の言説である。

> 一般にはデサはすこぶる原始的であるといふ風にいわれているが原始的といふよりは寧ろ東洋的な社会を形成してゐる，(中略) この村落共同体といふものは政治組織であり，経済組織であり，縮まつた社会になつてゐる。さういふ意味においてこれが国家の基礎になるところの単位と見ていゝ。(斉藤 1945：10，傍線は筆者)

この斎藤の言説は，スカルノがデサをジャワ社会の共同性と自治性が顕現する共同体とみていた視線と重なるものである。この点において，スカルノと日本軍政当局のデサに対する視線は通底していたといえる。

14 旧慣制度調査委員会は1942年9月24日に治政秘題486号「旧慣制度調査委員会設置ノ件通牒」によって設置された軍政の諮問機関である。インドネシア語の名称

は "Panitja Pemerikasa Adat dan Tatanegara" である。旧慣制度調査委員会の設置は，独立運動に対する妥協策という背景のほか，カナヘレが指摘しているように，スカルノの軍政顧問への昇格，３Ａ運動の終焉，行政組織の再編，日本人官僚の登場など，初期の軍政の安定に寄与したと思われる一連の重要なできごととも対応していた（Kanahele 1967=1977:111）。地理学者・別枝篤彦は，1942年夏ごろに将来のインドネシア独立にふさわしい体制について軍司令部から内々の諮問があったと回想し，この諮問が旧慣制度調査委員会の発足と関連があったと述べている（別枝 1991：377）。別枝は，大阪商科大学（現・大阪市立大学）予科教授を経て，1942年に軍に徴用され第16軍司令部に勤務し，南方文化研究室長として終戦を迎えた。

15　議事録の引用にあたり，本文中の表記について示しておきたい。本文にある（戸田 1995［第７回］：４）は，第７回調査委員会の議事録４ページを引用することを意味する。また，戸田の復刻した同文献では，各回の調査委員会の議事録ごとにオリジナルのページ数と思われる印字と，戸田が復刻のさいに手書きで記入したとおもわれる２分冊全体のページ数の記入がある。しかし，戸田が記入したと思われる一部のページは製本の時に隠れてしまっているものもあるので，混乱を避けるため，表記は上述の例にならうことにする。

16　民衆総力結集運動は従前の三亜運動にかわって，1943年３月に組織された軍政協力のための運動である。インドネシア語では "Poesat Tenaga Rakjat" と呼ばれた（略称は Poetera ＝プートラ）。運動の中心を担ったのは，スカルノやハッタをはじめとする民族指導者や高名な宗教指導者たちであった。とくにスカルノは，かねてから軍政当局に対して民衆運動の許可を強く求めていたが，当局側も軍政協力の枠内に限定することを条件にこれを認めた（斉藤 1977: 116）。したがって，民衆運動といっても自由な運動が保証されていたわけではなく，「政治化を伴わない動員」（倉沢 1992:314）が基本原則であった。

17　同発言がなされた第７回旧慣制度調査委員会の開催前日に，スカルノは軍政監部の中山総務部長から民衆総力結集運動の創設が，東京の中央政府から認可されたことが伝達されている（戸田 1995［第７回］：４）。

18　山本茂一郎は1943年３月から1944年11月までジャワ軍政監部総務部長を務めたあと，引き続き1945年８月までジャワ軍政監の地位にあった。

『新ジャワ』第２巻第１号［1945年１月号］の「軍政展望」には，前任の軍政監である国分新七郎の更迭と，山本の軍政部長からの軍政監昇格の記事が掲載されている。そして，同記事では山本を「軍政家としては既に定評があり，南方占領下第一の称あるジャワ軍政を推進整備した事実上の第一人者」［『新ジャワ』第２巻第１号［1945年１月号］と紹介している。また，山本も回想録のなかで「軍政が本格的に開始された時期から軍政終了までの間に関与した上級者の一人であり，且終戦処理の当面の担当者」［山本 1979：3］と自認している。

## 文献

### 日本語文献

井上謙二，1945a，「新生活運動とデサ—その経済的立場からの理解」『新ジャワ』第2巻第5号（1945年5月号），35-40.

今村均　1971，『私記・一軍人六十年の哀歓』芙容書房

加納啓良，1990，「共同体の思想—ジャワ村落論の系譜」土屋健治編『講座東南アジア学3 東南アジアの社会』弘文堂，17-53.

外務省南洋局，1941，『東印度土民村落共同體「デサ」に就テ』

桂沢英雄　2004，「『ゴトン・ロヨン』概念の誕生と変容—植民地末期からスカルノ期まで」『アジア経済』45(2): 2-29.

倉沢愛子，1992，『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社

小林和夫　2006a，「インドネシアにおける『創られた伝統』の萌芽と制度化の端緒—日本占領期ジャワにおけるゴトン・ロヨン（相互扶助）をめぐって」『東南アジア研究』44(1): 55-77.

————　2006b，「日本占領期ジャワにおける『伝統の制度化』—隣組制度とゴトン・ロヨン」『アジア経済』47(10): 2-29.

小座野八光　1997，「日本占領下ジャワの村落行政」倉沢愛子編『東南アジア史のなかの日本占領』早稲田大学出版部，3-30.

斉藤鎮男，1945，「生きているデサを語る座談会」『新ジャワ』第2巻第7号（1945年7月号），9-15.

————，1977，『私の軍政記—インドネシア独立前後』日本インドネシア協会

清水斉　1944，「三亜運動から独立容認迄」『新ジャワ』第1巻第2号（1944年11月号），25-29.

白石隆，1996，『新版インドネシア』NTT出版

————，1997，『現代アジアの肖像11 スカルノとスハルト—偉大なるインドネシアをめざして』岩波書店

1944，『軍政下ジャワ産業綜観 第1巻』（= 1990［復刻版］，倉沢愛子解題『軍政下ジャワ産業綜観 第1巻』龍渓書舎）

ジャワ新聞社　1944，『ジャワ年鑑（昭和19年）紀元二千六百四年』（= 1973［復刻版］，『ジャワ年鑑（昭和19年）紀元二千六百四年』ビブリオ）

高岡信次，1945，「デツサの財政」『新ジャワ』第2巻第2号（1945年2月号），70-9.

谷口五郎，1966，『スカルノ—嵐の中を行く』朝日新聞社

————，1991，「証言6 ジャーナリストとしてみたジャワ軍政—谷口五郎」インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集—日本軍占領下のインドネシア』龍渓

書舎，261-94.
戸田金一（復刻）1995，『日本軍政下インドネシア【旧慣制度調査委員会議事録】第1分冊』
土屋健治　1971a，「スカルノの研究—パンチャ・シラ成立の過程」『東南アジア研究』8(4): 566-579.
————，1971b，「スカルノとハッタの論争」『東南アジア研究』9(1): 61-88.
————，1991，「マルハエニズム」土屋・加藤・深見編『インドネシアの事典』同朋舎
————，1994，『インドネシア—思想の系譜』勁草書房
鳥養太一郎，1944，「デツサ研究—その発生史的考察」『新ジャワ』第1巻第1号（1944年10月号），58-67.
別枝篤彦，1991，「証言8 南方文化の研究にたずさわって—別枝篤彦」インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集—日本軍占領下のインドネシア』龍渓書舎，357-403.
増田與，1971，『インドネシア現代史』中央公論社
宮武正道，1942，『インドネシア人の文化』大同書院
山本茂一郎，1944，「東印度の独立容認と日本人に與ふ」『新ジャワ』第1巻第2号（1944年11月号），6-12.
————，1978．『回想録—激動の人生八十年』自費出版（山本光子編）
————，1979，『私のインドネシア—第十六軍時代の回想』日本インドネシア協会
芳岡良音，1944，「東印度の傳統（一）」『新ジャワ』2(5): 10-17.

外国語文献

Anderson, Benedict R.O' G. 1961. *Some Aspects of Indonesian Politics under the Japanese Occupation: 1944-1945*. Ithaca: Cornell University.
——— 1966. "Japan: The Light of Asia." Josef Silverstein ed. *Southeast Asia in World War II: Four Essays*. New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University, 13-50.
——— 1972. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance. 1944-1946*. Ithaca and London: Cornell University Press.
Benda, Harry. 1965. "Decolonization in Indonesia: The Problem of Continuity and Change." *American Historical Review*. 70(4): 1058-1073.
Dahm, Bernhard. 1969. *Sukarno and the Struggle for Indonesian Independence*. Ithaca and London: Cornell University Press.
Herring, Bob. 2002. *Soekarno: Founding Father of Indonesia 1901-1945*, Leiden: KITLV Press.
Hobsbawm, Eric. 1983. Introduction: Inventing Traditions. Hobsbawm, Eric, and Terrence Ranger eds., *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press: 1-14.

———. and Terrence Ranger, 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press（邦訳は前川啓治・梶原景昭ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店 1992 年）.

Kahin, George McTurnan 1952, *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell Southeast Asia Program Publications.

Kanahele, George S. 1967. *The Japanese Occupation of Indonesia: Prelude to Independence*. Ph.D. dissertation, Cornell University（邦訳は後藤乾一・近藤正臣・白石愛子訳『日本軍政とインドネシア独立』鳳出版 1977 年）.

Legge, John D., [1972] 2003, *Sukarno: A Political Biography*, 3rd edition, Singapore: Archipelago Press.

Malik, Adam, 1980, *In the Service of The Republic*, Singapore: Gunung Agung.

Notosusanto, Nugroho, 1981, *Proses Perumusan Pancasila Dasar Negara, Sinar Harapan*, 3 Agustus 1981.

——— 1982, Proses Perumusan Pancasila Dasar Negara, Jakarta: Balai Pustaka

Pranarka, A.M.W, 1985, *Sejarah Pemikiran tentang Pancasila*. Jakarta: Center for Strategic International Studies.

Soekarno, 1945 [1947], "Lahirnya Pancasilia," *Lahirnya Pancasila*, Yogyakarta: Guntur.

———, 1959, Dibawah Bendera Revolusi, Jilid I, Jakarta: Panitia Penerbit Dibawah Bendera Revolusi.

——— 1965a, Dibawah Bendera Revolusi, Jilid II, Jakarta: Panitia Penerbit Dibawah Bendera Revolusi.

———, 1965b, *Marhaenisme: Ever Upward never Go Down*, Jakarta: Tema.

———, 1965c, Sukarno : An autobiography, as told to Cindy Adams, Indianapolis: Bobbs-Merrill.

Soemarjoto, n.d, *Marhaenisme: Ajaran Bung Karno*, n.d: Penebar Swadaya.

Taylor, Jean Gelman, 2003, *Indonesia : Peoples and Histories*, New Haven: Yale University Press.

Weatherbee, Donald E. 1966. *Ideology in Indonesia: Sukarno's Indonesian Revolution, Monograph Series No.8*. New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University.

（雑誌）

『新ジャワ』［1944-45］（復刻版 1990）倉沢愛子解題．東京：龍渓書舎.

（法令集）

治官報・Kan Po［1942-45］（復刻版 1989）倉沢愛子編解題．東京：龍渓書舎.